

回向功德抄

又訪事なくば何の世にか浮ぶへきや。我父母に物をゆづられながら、死人なれば何事あるべきと思て、後生を訪ざされは、惡靈と成り、子々孫々にたゞりをなすと涅槃經と申經に見えたり。他人の訪ぬよりも、親類財を与へられて彼苦を訪ざらん志の程うたてかるべし。悲むべし悲むべし、哀むべし哀むべし。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（平成校定日蓮大聖人御書・二八一六頁）

先祖や親戚・知人で亡くなつた人の中に死後の世界で苦しんでいる人があれば、生きている遺族の側にも其の苦しみや悩みが影響してきます。ですから、遺族の人達の強い信心と御本尊の功力によつて亡くなつた人が成仏の境界にならないと生きている人も、此の社会もほんとうの幸せにはならないといふことになります。

このことを仏教では「三世の益に欠けるが故に五濁惡世となる」といわれています。したがつて塔婆供養・先祖回向ということが必要になつてくるのです。

塔婆に題目をしたためて戒名や俗名を書けば、それは、亡くなつた人の体をあらわしているのです。そして御本尊にお経をあげ、お題目を唱えるとその塔婆は仏界を現じ、御本尊のお力によつて亡くなつた人の生命に感應するのです。これを「感應妙」と言うのです。

したがつて塔婆供養の場合は、回向する者の一念心が大切な因となります。これはまことに難解なことです。塔婆供養はこの「感應妙」の原理によつて死者が成仏の境界に進むのです。

塔婆を建てるのは……

卒塔婆とは梵語の音訳で「塔」とあり、又、瑜伽論記第二十一には「窣堵波（卒塔婆）」は此に供養処という」と言う意味である、とあります。

また法華經には、過去の諸仏世尊が涅槃に入られた時、大せいの仏弟子たちがたくさん塔を建てて供養したという話が説かれています。ところが仏弟子たちが建てた塔は、現代からでは想像もできないような豪華で広大なもので、その数は数えきれない程であつたと言われています。

ところで、縁者が亡くなつたからといって、みんながこんな大きな塔を建てていたら、せまい国土はたちまち塔でいっぱいになつてしまつであろうからと、そこで、いつの頃からか、今のような、薄い板で塔の形に作られるようになつたと伝えられているのです。又、この塔の形は、上の方がぎざぎざになつていて、これは「五輪」といつて、人間の体を譬えていいます。即ち、ほど（へそ）より下を「地輪」といい、ほどより胸に至るまでを「水輪」といい、胸より喉までを「火輪」といい、喉より額までを「風輪」とい、額より頭のてっぺんまでを「空輪」と言つてゐるのです。このように人間の姿、

形を五輪に譬えたことによつて、その形を塔にしたのであります。又、この五輪（地・水・火・風・空）は五大種とも、五行ともいゝ、万物の構成要素でもあります。三世諸仏総勘文抄（一四一八頁）には「五行とは地水火風空なり。五大種とも五蘊とも五戒とも五常とも五方とも五智とも五時ともいふ。只一物にて経々の異説なり。内典外典の名目の中にはこれ開して、一切衆生の心中の五仞性、五智の如來の種子と説けり。是則ち妙法蓮華經の五字なり。此の五字を以て人身の体を造るなり。」とあります。

又、人間の眼と耳と鼻と舌と身の、五官を形どつてあるとも言われてゐるのです。故に、ここに妙法の題目を書くのは、その五官が妙法と一緒になつたことを表現し、その五官の靈名（俗名や戒名等）をその下に書いて、その成仏を証明するのです。

そして、裏に何の誰某と、願い主の名を書きますが、それがなければ意味はないのです。よく、「本家で供養しているから自分はする必要はない」と言う言葉を耳にしますが、しかし、供養は自分がするから功徳があるのであって、他がしているから自分はある必要はない、という理屈は成り立たちません。例えば「兄貴が親にお歳暮を送つてゐる、お年賀の挨拶にも行つている。だから自分はお歳暮も送らないし、お年賀の挨拶にも行かない」と言うのでは人に笑われる事でしょう。ところが、これほどの理屈が解る人でも塔婆回向を願わない。先祖を供養することも人まかせの人がいるのです。

親の成仏は必ず子に報いるのである。と言われているのですから、親が生きている間は、せいぜい大事にして後悔のないように尽くしておくものであり、もし、既に親のない人はせめて、春秋の彼岸とお盆くらいは、塔婆供養を願い、親の姿をそこを見て、その成仏を祈ることこそ最も大事なことであります。

草木成仏口決（五一二頁）に「我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは、死の成仏にして草木成仏なり」と仰せられてゐます。つまり、生きてる者が大御本尊にしつかりとお題目を唱えると成仏できて幸せになるように、塔婆供養の原理は自分で意思表示の出来ない亡者や、非情の草木が御本尊の慈悲、お題目の力によって成仏できるのです。故に、塔婆を立てるとなくなつた人は勿論、供養した人もまた、大きな功徳を受けることができます。その功德の大きさは量り知れないとたくさんの經文に説かれています。す。例えば、仏説造塔功德經には、

「昔印度に波斯匿という王様がありました。ある時仏様の所へ行つて『私は占い師にみてもらつたところ、あと七日しか寿命がないといわれたので大変苦しんでいます。どうかこの苦しみを救つて下さい』といいました。これを聞かれた仏様は『王様よ、そんなに苦しむことはありません。あなたが命を延ばして幸せになりたいのでしたら塔婆を立てなさい。塔婆をたてるその功徳はとても大きくて量り知れない程です。塔婆建立のことはあらゆる仏様がほめたたえています』と申され、そして、次のような因縁話をなされたのです。『大昔ある牧場に一人の子供がいました。そこへ占い師が来て、その子供はあと七日すれば死ぬであろうといいました。ところがその子供は他の子供とママゴト

遊びをしながら自分の背の高さ位の塔婆を建てました。するとその子供は、其の塔婆を建てた功德によつて七年も長生きしたといわれています』と、そこでこの話を聞いた波斯匿王も発心して盛んにたくさんの塔婆を建てたところ、仏様のお言葉通り、大功德を受け、寿命も長く延ばすことができて、王の家は栄え、体も健康になり一生幸せな生活を送ることができました。』とあります。

大聖人様も中興入道御消息（新編一四三四頁）に、「丈六のそとばをたてゝ、其の面に南無妙法蓮華經の七字を顕してをはしませば、乃至過去の父母も彼のそとばの功德によりて、天の日月の如く浄土をてらし、孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて」と仰せになつています。

このほかたくさんある經文に塔婆供養の功德が説かれていますが、その要点は次のとおりです。

- ① 塔婆供養をすると寿命を延ばせる。
- ② 大きな福德が積める。
- ③ 未来のできごとを予知し事前に悩みや苦しみが除ける。
- ④ 常に仏様の慈悲をうけることが出来る。

等等、仏法上、塔婆建立の意義はまことに深いものがあります。
亡くなつた人に追善回向をするに塔婆供養が最上の方法で、亡くなつた方は塔婆供養を待ちこがれているのです。

大聖人は十王讚歎抄（平成校定御書・二七八五頁）に「今頼む方とては婆の追善計りなり。相構へて相構へて追善を営み亡者の重苦を助くべし」と申されています。

しかしながら御本尊をはなれた塔婆回向は眞の供養とはいえないません。故に私達は第一に御本尊を信じ、御本尊を中心に一生懸命信心修行して功德を積み、その功德善根をもつて亡くなつた人に塔婆回向をしなくてはなりません。

私達の毎日の生活の中に「報恩の心」、「追善の気持」を忘れることなく、そして正しい塔婆供養の意義を理解して、故人の成仏を祈念することが最も大切な事であります。

次に又、先祖の年回は、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌…と続きます
が、それ以後は各三、七に当たるときにすればよいのです。数え方は亡くなつたその年
も入れて数えるのです。たとえば令和元年の八月十日に亡くなつた人があるとすれば、
令和二年の八月十日が一周忌で、令和三年の八月十日が三回忌であります。令和七年の
八月十日は七回忌である、というように数えるのです。もし、十五年目とか二十一年目
とかにやりたければ、それは年回とは言わず、〇年めの「祥月命日」といいます。

又、その年の命日の前日の夜を御遠夜といい、夜ならば御遠夜にやり、当日ならば午
前中にやるのがよいと言われています。近頃のように、日曜祭日に休みの人が多くなる
と命日の当日とか前夜にはなかなか時間ができない場合が多いですが、そんな場合は早い方がよいでしょう。命日より遅れることはよくないのです。それはなぜかという

と 大聖人のお教えの中にもあるように、人が亡くなると初七日・四十九日・百ヶ日、一年、三年、七年、十三年、十五年、十七年……と、その命日には閻魔大王の閻所を通らなければならぬのです。而るに子孫が信仰深い者であれば、その日までには聖僧に供養を願い、法華經の声も届いているから、亡者がそこを通るときには番兵の鬼たちもおじぎをして通してくれるのですが、信仰心のない子孫を持つ亡者は閻所を通るとき、聖僧の回向もなく、法華經の声もどぞいていないため、鬼どもにひどく軽蔑され、からかわれ、金棒^{かなぼう}で打たれたりしてつらい悲しい思いをするのです。故に、「命日の読経は命日にするのが一番よい」と言われているのです。どうしても時間がなければ早い方がよいのです。即ち、先に法華經の声がどぞいていれば、鬼たちも安心して、いねむりでもしていることでしょう。その間に亡者たちも悠悠^{ゆうゆう}と大手をふって閻所を通りすぎることができるのではないでしようか。

冒頭挙読の回向功德抄は、人の世にあるも不幸にして亡き父母の追善供養をも一向にしようとする人々に対して、それを諒められて、追善供養を忽^{ゆる}せにしてはならないと教えられており、そして回向の有無が亡者に多大な影響を及ぼすことを説かれているのです。そして、亡者^{もうじや}（特に父母）に対する恩を忘れず、常に追福作善を為すよう勧められている御書です。

開目抄（五三〇頁）には「仏法を学^{がく}せん人・知恩報恩なかるべしや、仏弟子は必ず四恩をしつて知恩報恩をいたすべし」と。大聖人の仏法を奉ずる私たちは、人間としていかに生きるべきか、という面にも心がけるべきであると、つまり、大聖人様は人として守るべき道（人倫）の基本は「知恩報恩」であると教えられているのであります。特に私たちが忘れてはならないのが、衆生を三世にわたつて救うために出現される「仏」・悟りに至る「真実の法」・正法を伝持し「衆生を導く僧」、つまり仏・法・僧に対する三宝の恩です。そのためには片時も広宣流布を忘れず折伏に励んで行くことが最も肝要な事であります。以上。

（令和六年九月・秋季彼岸会の砌）